

博士論文要旨

論文題名：言語類型論の視点から見る言語景観の日中比較対照 —言語の普遍性と個別性について—

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
ウ ラクイク
YU Leyu

本論文では、看板・標識およびピクトグラムなどの「言語景観」を主たる対象として、言語表現について言語類型論的な指標（パラメータ）の幾つかを援用し、それぞれの言語の類型論的な特徴づけを試みた。

看板や絵文字などなんらかの情報を伝えるものであれば、そこには、言語や文化、大きさに言えば世界観が入りこみ、他言語話者や文化の異なる集団からみれば、誤解や違和感を生じさせることが少なくない。看板表記やタイトルなどの簡単な語句であっても各言語の差異が反映することがあることをふまえ、本論文では、可能な限りピクトグラムや言語景観に現れる表現などを取り上げて、言語類型論的、認知言語学的、日中言語対照的観点から検討を加え、理解に差が生じる原因を探ってみた。

問題の所在の部分では、標識や看板などの言語景観に特徴づけ、言語景観に関する先行研究を紹介し、検討を加えた。

第1部では、看板・標識という文字言語による例に注目し、「言語景観」の内容と機能から看板・標識を三分した。それは指示標識・勧告標識・命令標識である。さらに、各分類から日本語と中国語の表現上の相違を具体的に論述した。続いて修辞と数量詞の使用の点から論説を加えた。勧告標識や命令標識などで用いられる修辞にはインパクト感を強め、印象を与えられる効果があると指摘した。また、日本語でも中国語でも具体的な数字を利用し看板・標識の真実味を醸し出せることを指摘した。このほか、中国語の注意書きに現れる《有》の使用から日本語の「空き室有り」の古い漢語の形が看板に残される点も指摘した。古い漢語と「有り」という文末に現れる表現に踏まえて、看板や標識などにみる方言の使用と文末表現に関して、論述を試みた。方言を用い、ある地域と国の特徴を表現する独特な効果があり、「言語景観」とある地域や国の文化と依存している点が反映されている点を指摘した。

第2部においては、ピクトグラムを中心に論を展開した。まず、言語の普遍性と個別性

に着目し、JIS 基準に基づいたピクトグラムには個別性・恣意性が認められることを指摘し、ISO 標準と整合化する中で、普遍性を持つようになったことを指摘した。次に、JIS 図記号と ISO 図記号を比較しながら、読み手が違った理解をしてしまう理由「人物が描き加える」という点も指摘した。また、ピクトグラムは絵によって情報を伝達するものなので、アイコン的な側面が強く、それだけに普遍性と言ってもよい面が濃厚に存在するが、記号である以上、恣意的な側面、従って、個別的な側面も否定できないことを指摘した。こういったアイコン性と漢字の六書との関連性についても考察を加えた。六書における象形・指事・会意がピクトグラムにおいても類似の手法が見られること、六書の仮借が存在しないのは、ピクトグラムには特定の音形式が存在しないことによると指摘した。さらに、英語表記に表われる重複表記の現象に注目し、意味と形式にズレが存在することを指摘した。

第 3 部では、まず、色彩語の普遍性と個別性について論述を加えた。赤と緑、藍と黄、白と黒などに見られる補色関係から日本語と中国語の色彩に対する心理あるいは色彩語の象徴的意義の相違について論述した。また、「もみじマーク」や「トイレ」のピクトグラムに用いられる色彩が年齢や性別と安易に結びつけることの問題点を挙げ、発案者の工夫が必要であることを指摘した。さらに、普遍性と個別性の観点から、言語景觀に現れる言語表現を視点、方向観念、デフォルト、初期値の異同から問題点を挙げ、分析した。さらに、ピクトグラムに潜むステレオタイプの問題について論じた。

本稿では、言語類型論的なパラメータを用い、日本語、中国語、英語がどのような性格を持つのかを様々な観点から論じ、多言語主義社会においては、多言語の共通点と相違点に注目し、摩擦を解消するための工夫が必要であることを主張した。

今後の課題としては、本稿で扱った事例をさらに調査分析するとともに、国際化が進みつつある視覚障害者に対するプラットホームなどの注意喚起に用いられる「ピンポン」などの音声など、視覚のみならず聴覚的な問題まで対象を広げ、コミュニケーションを促進するものと阻害するものを明確にすることを研究テーマにして、引き続き研究を行いたい。